

金 剛 寺 貝 塚
宇 賀 崎 貝 塚
宇 賀 崎 1 号 墳^他

昭和 55 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

金 剛 寺 貝 塚

宇 賀 崎 貝 塚

宇 賀 崎 1 号 墳_他

序

宮城県内には、私達の祖先がのこした数多い遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたものであり、これを愛護し活用するとともに後世に伝えていくことが現代の私達の重要な責任であると考えます。近年地域の開発事業が進展するに伴ない、埋蔵文化財の保護が県政のなかで重要視されてきているのもその線に沿ったものであります。

本報告書は、県教委がこれまで発掘調査を実施した遺跡のうち、年次計画に従って整理した「宇賀崎貝塚・金剛寺貝塚および宇賀崎1号古墳」について、成果をとりまとめたものであります。

ここに本書を刊行するに当たりまして、関係された方々の御協力に深甚なる敬意を表しますとともに、本書が遺跡に対する御理解の一助となり、さらに学術上も大きく役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭和55年3月

宮城県教育委員会教育長 北 村 潮

目 次

金剛寺貝塚	1
附 金剛寺貝塚採集の剥片接合資料	41
宇賀崎貝塚	55
附 宇賀崎貝塚出土の人骨および犬骨について	167
宇賀崎1号墳	183
恵比須田遺跡出土の土偶	217
昭和54年度発掘届一覧	223
宮城県文化財調査報告書一覧	229

例 言

1. 本書は宮城県教育委員会が主体、もしくはおもに主体となって調査を行った遺跡の調査報告を集録したものである。

2. 本書に集録した遺跡とその調査内容は次の通りである。

名取市所在 金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎一号墳発掘調査（昭和46・47年度実施）

田尻町所在 恵比須田遺跡出土土偶実測調査（昭和54年度実施）

また別に、昭和54年度発掘届一覧、宮城県文化財調査報告書一覧を掲載した。

3. 各遺跡の報告をまとめるに際し、次の方々および機関から多くの御指導・助言等をいただいた。（順不同）

金子 浩昌氏（早稲田大学講師）

興野 義一氏（日本考古学協会員）

藤沼 邦彦氏（東北歴史資料館考古研究科長）

白鳥 良一氏（宮城県多賀城跡調査研究所技師）

東北大学文学部、名取市教育委員会、田尻町教育委員会、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所

また、本書に掲載した石器、石製品の石質鑑定は東北大学理学部蟹沢聡史助教授による。

4. 各遺跡の執筆は、本文中に特に明示したもの（金剛寺貝塚附篇、宇賀崎貝塚附篇）を除いて、調査時における調査員および現宮城県教育庁文化財保護課員の協議を得て、下記の文化財保護課職員が担当した。

「金剛寺貝塚」 小井川和夫

「宇賀崎貝塚」 阿部 恵

「宇賀崎1号墳」 太田昭夫（Ⅰ～Ⅳ）氏家和典（Ⅴ・Ⅵ）、

「恵比須田遺跡出土の土偶」 丹羽 茂

5. 本書に掲載した「金剛寺貝塚」第1図（4ページ）、「恵比須田遺跡出土の土偶」第1図（219ページ）は、それぞれ建設省国土地理院発行の2万5千分の一地形図「仙台西南部・東南部・岩沼・仙台空港」および同「高清水・西野」を使用して複製したものである。

6. 恵比須田遺跡出土の土偶を除き、各遺跡の調査に関するすべての資料（出土遺物、諸記録等）は宮城県教育委員会において保管している。

こん ごう じ 貝 塚
金 剛 寺

目 次

I. 調査に至る経過	3
II. 遺跡の位置と環境.....	6
III. 調査の目的・方法.....	11
IV. 調査の成果.....	12
1. 北斜面の貝層および遺物包含層とその出土遺物	12
2. 南斜面の貝層および遺物包含層とその出土遺物	14
3. 台地頂部の状況とその出土遺物.....	24
4. 台地縁辺部の状況とその出土遺物	25
5. 表面採集・地点不明の遺物.....	25
V. まとめ.....	28
附. 金剛寺貝塚採集の剥片接合資料.....	41

I. 調査に至る経過

金剛寺貝塚は、名取市西部の丘陵地に立地する貝塚であり、古くから知られていたものであり、すでに明治時代にその確認がなされている（坪井：1908）。その後も「日本石器時代遺物発見地名表」（東京帝国大学：1928）、「日本貝塚地名表」（酒詰：1938）等各書に縄文時代の遺跡として掲載されている。そして昭和22年暮から23年春にかけては、東北大学医学部山内清男氏等の指導によって、発掘調査が実施されている（後藤：1960）。その結果ことに本貝塚出土の土器の一部には、陸前地方縄文後期後半の土器型式編年上、「金剛寺式」の名称が与えられて（伊東：1957）、当地方における標式遺跡となるなど、学史的にも著名な貝塚である。

ところが、昭和45年宮城県農政課は、以前から建設を立案していた宮城県農業総合開発センターの建設予定地として本貝塚を含む付近丘陵地一帯を設定し、その計画を、県教育庁社会教育課に提示した。

これに対し社会教育課は、遺跡の重要性にかんがみ、その保存に配慮するよう申し入れると同時に、その保存範囲の確定等を目的として、試掘調査を実施することにした。

調査の要項は下記の通りである。

1. 遺 跡 名 金剛寺貝塚地区（宮城県遺跡地名表登録番号：12001）
2. 所 在 地 宮城県名取市高館字川上
3. 調査期日 昭和46年1月5日～同1月15日
4. 調 査 員 宮城県教育庁社会教育課
志間泰治・藤沼邦彦・白鳥良一
5. 遺跡略号 KG

なお、本調査に関する報告としては、すでにその概略が示されている（宮城県教育委員会：1973）が、本書をもって最終報告とする。



○ 全長50m以上の古墳

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	時	代	番号	遺跡名	時	代
1	金剛寺貝塚	縄文(前、後、晩)		25	泉 遺 跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	
2	栗光田遺跡	縄文、奈良、平安		26	北東宮下遺跡	縄文、奈良、平安	
3	川上遺跡	縄文、弥生、奈良、平安		27	五郎市遺跡	縄文、奈良、平安	
4	今熊野遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安		28	宮下遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	一部埋没
5	八反田遺跡	弥生		29	宇賀船貝塚	縄文(早、前)、弥生、古墳	一部埋没
6	家尾遺跡	奈良、平安		30	松崎遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	埋 没
7	東内館遺跡	古墳、奈良、平安		31	十三塚遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	
8	南台宮跡	奈良、平安		32	手倉田遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	一部埋没
9	南台西遺跡	奈良、平安		33	箱崎遺跡	中世	
10	田高遺跡	弥生、古墳、奈良、平安		34	飯野原西遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	
11	清水遺跡	弥生、古墳、奈良、平安		35	飯野原遺跡	弥生、古墳	一部埋没
12	原 遺 跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安		36	山下遺跡	古墳、奈良、平安	
13	下田高南遺跡	奈良、平安		37	船瀬遺跡	弥生、古墳	
14	八 幡 遺 跡	古墳、奈良、平安	一部埋没	38	大木戸遺跡	縄 文	一部埋没
15	町基遺跡	奈良、平安		39	大塔山館跡	中世	
16	野田山貝塚		埋 没	40	南小袋石遺跡	縄文、奈良、平安	
17	西野田遺跡	旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安	一部埋没	41	養 甫 遺 跡	縄文、弥生、奈良、平安	埋 没
18	西滝沢遺跡	縄文		42	東高森遺跡	平 安	
19	岩沢遺跡	奈良、平安		43	宿前遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	
20	東前沢遺跡	縄文、奈良、平安	一部埋没	44	柳沢遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	
21	笠島遺跡	奈良、平安		45	宿 遺 跡	縄文、奈良、平安	
22	北 台 遺 跡	縄文、奈良、平安		46	石沢遺跡	奈良、平安	
23	鏡野田西遺跡	弥生		47	楠ノ木貝塚	縄文、奈良、平安	
24	鏡野田東遺跡	弥生、奈良、平安		48	西六軒遺跡	古墳、奈良、平安	

番号	古墳名	形態・規模など	番号	古墳名	形態・規模など	
①	西北畑古墳	円墳、現存径約10m	⑩	字町古墳	径約12mの円墳	
②	箕輪A地区古墳群	前方後方墳(45m)と2基の方墳	⑪	山岡古墳	径約20mの円墳	
③	箕輪B地区古墳群	3基の円墳	⑫	一本杉古墳	径約20mの方墳	
④	野田山古墳群	2基	埋 没	⑬	天文塚古墳	
⑤	北野横穴古墳群			⑭	雷神山古墳	主軸約168mの前方後円墳
⑥	名取大塚山古墳	主軸89mの前方後円墳		⑮	小塚古墳	径56mの円墳
⑦	黄ノ塚古墳群	1基の小型前方後円墳と34基の円墳	2基埋没	⑯	北小塚古墳	
⑧	箱塚古墳群	3基の円墳		⑰	切通上古墳	
⑨	観音塚古墳群	径約20mの方墳		⑱	鉾原横穴古墳群	
⑩	山原北古墳	主軸約10mの前方後方墳		⑲	原部横穴古墳群	
⑪	山 麓 古 墳	主軸約90mの前方後方墳		⑳	小豆島横穴古墳群	一部埋没
⑫	観音塚古墳	主軸約93mの前方後方墳		㉑	甲賀館1号塚	埋 没
⑬	宮山古墳	主軸約80mの前方後方墳		㉒	宇賀崎古墳群	4基の方墳を含む6基の古墳
⑭	華師堂古墳	主軸約67mの前方後方墳		㉓	北東宮下古墳	
⑮	雲南古墳			㉔	庭 古 墳	径約15mの円墳

II. 遺跡の位置 (第1、2、3図)

本貝塚の所在する名取市は、旧奥州街道の宿場町増田を中心として発達した、仙台市に南接する小都市で、西部に丘陵地がひかえているが、市の多くは沖積地で占められている。水田耕作を主とする農業地帯であるが、比較的温暖な気候のこともあって、そ菜・園芸作物等を栽培する近部農業も盛んである。

また、仙台市への通勤圏として、西側の丘陵地を中心に昭和30年代後半から宅地化も進み、仙台市周辺では、早くに衛星都市的性格を備えた地域でもある。

市内には数多くの遺跡の分布が認められ、宮城県内でも最も分布密度の高い地域であるが、その中でも特に、この西側丘陵縁辺およびそれに接する低地上ではそれが濃密である。丘陵地の宅地化に伴う諸開発は最近ようやく落ち着きをみせたものの、その初期の段階においては、幾多の遺跡に影響を及ぼしたものと推定される。

ところで、金剛寺貝塚の立地するのもこの西部丘陵地縁辺上である。

この丘陵は、宮城県西部を広くおおむね陸前丘陵（陸前丘陵は、西部においては、山形県と境をなす奥羽脊梁山地に連続する）の一部であり、それは、名取市を含む宮城県南地方では、高館丘陵とよばれている。

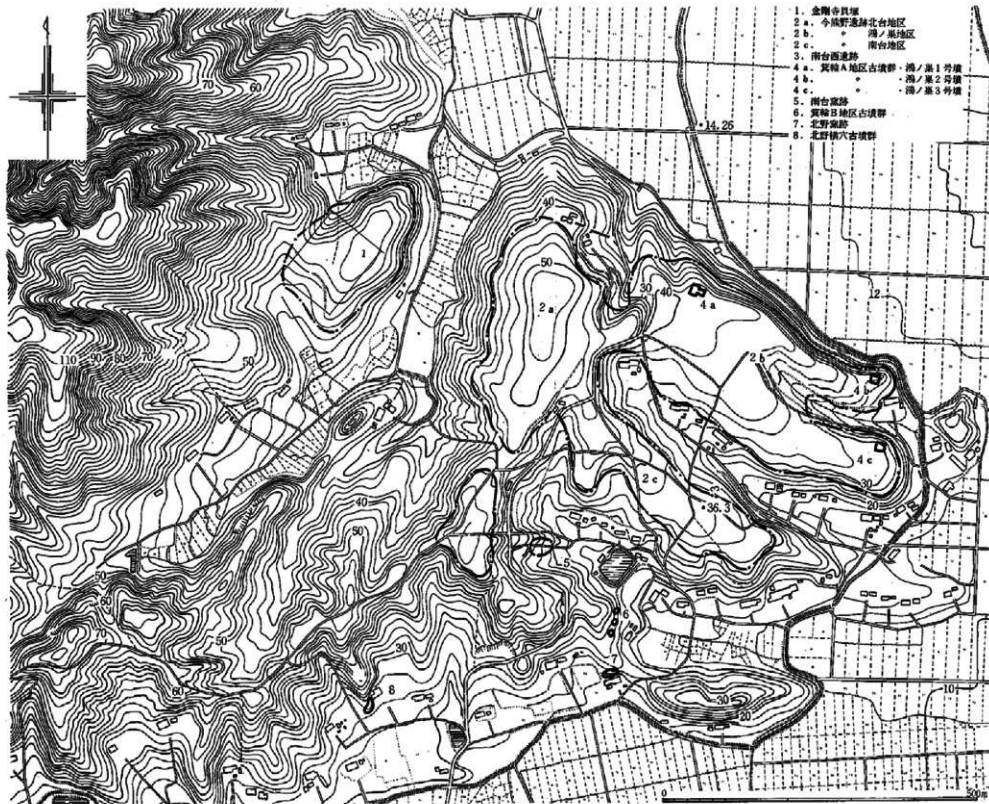
高館丘陵は、本貝塚の所在する高館地区では、狭い谷によって三分され、羊歯状に東の平野部にのびており、北から箕輪、野田山、賽の窪の各丘陵にわかれている。南にあたる賽の窪丘陵が最も平野部に突出し、次いで野田山、箕輪丘陵の順になる。

平野部に対する延びの割合に応じて開発が加えられており、賽の窪丘陵は、大規模団地造成のため大半が原状を失い、野田山丘陵は公共施設が建設されてその一部の原状が失われた。

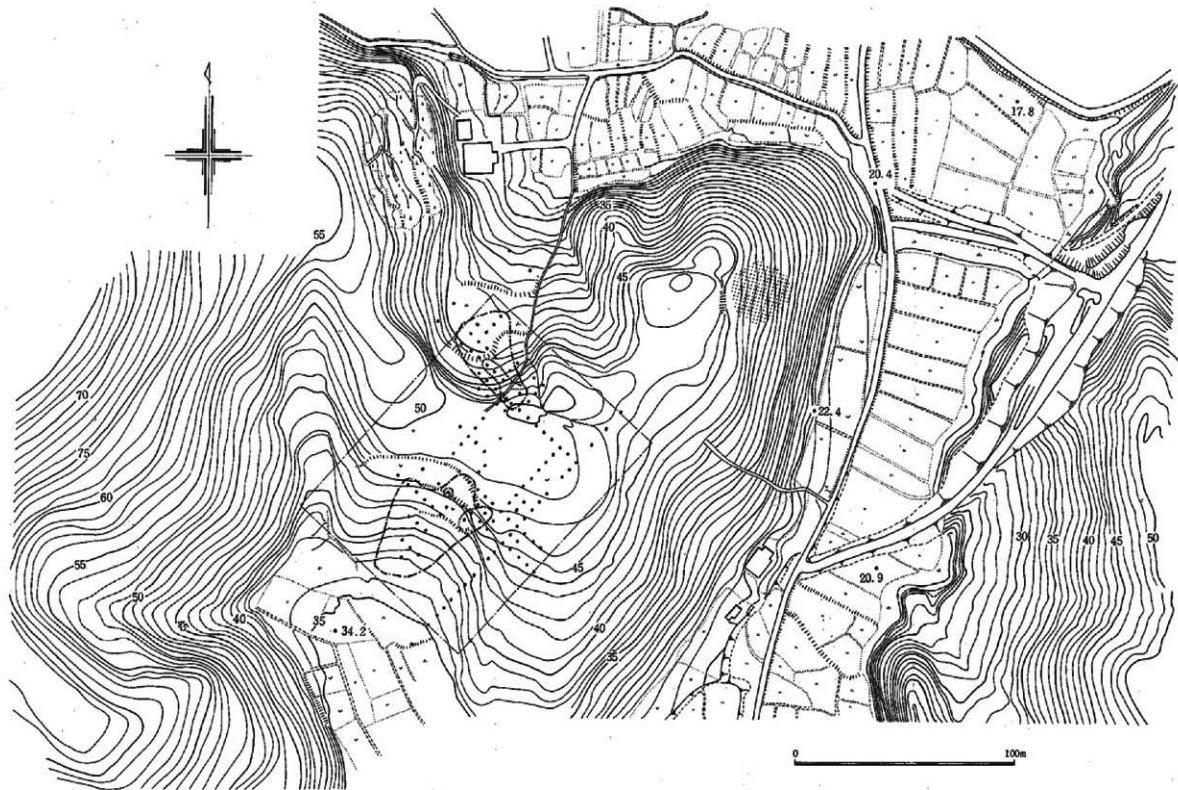
それに比して、箕輪丘陵は、一部は山林として、大部分は畑地として利用されており、旧地形が大きく変化することなく現在に至っている。そして、丘陵上には各時代を通じて多数の遺跡の存在がたしかめられている。

箕輪丘陵はさらに、東西に細長く入りこんだ谷によって南北に二分されているが、本貝塚は北側丘陵の先端部にあたり、この部分で丘陵の一部がさらに舌状に張り出した台地の基部斜面に貝層が形成されている。標高は約50m、谷底との比高は約30mである。また現海岸線までの距離は約1kmである。

なお、谷をはさんで対岸（南側丘陵）には、昭和46～47年に発掘調査が行なわれ、縄文前期の大規模な集落跡や、東北地方において初めて方形周溝墓が発見されて注目を浴びた今熊野遺跡がある。（宮城県教委：1973）



第2図 箕輪台地上の遺跡 (本図は昭和34年測図・44年修正の地形図をもとにしている)



第3図 遺跡周辺の地形（本図は昭和46年に作成された地形図をもとにしている）

- 昭和50年に確認された貝塚（本文25ページ参照）
- x 接合部資料採取地点（本文41ページ参照）

III. 調査の目的・方法

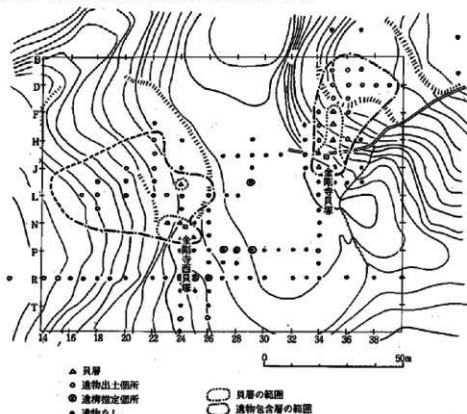
すでに述べたように、本貝塚を含む付近一帯が農業開発センター建設予定地として選定されたために、これに対応して遺跡の保存範囲を確定する必要が生じた。今回の調査は、その資料を得るための遺跡の範囲、内容の確認を目的とした調査である。

調査は、すでに貝層の存在が知られている丘陵基部の頂部および斜面部、東西100m・南北130mの範囲を主対象として実施した。

まず調査対象区に1辺5mのグリッドを設定した(グリッドの名称はアルファベットと算用数字の組み合わせによって冠した：第4図参照)。そして、各グリッドの北西隅に1×1mの試掘ビットを設けて、貝層、包含層の存在、遺物の出土状況等について調査に行った。各試掘ビットにおいては、遺跡の内容確認の意味からも、できるだけ無遺物層まで掘り下げて、包含層の厚さ等の確認を行ったが、包含層の遺存状態の良好と思われる部分においては、その存在のみの確認にとどめ、以下の掘り下げを行わなかったところもある。

なお、各試掘ビットの層位図の作成は、北・西壁において行った。

試掘地点は一部対象外に延びた部分も含めて130ヶ所である。



第4図 グリッドの配置とその状況

IV. 調査の成果

調査の結果、台地基部の北斜面および南斜面の二地域で貝層を含む遺物包含層が確認された。この二ヶ所の包含層にはさまれた台地頂部においては、包含層は認められなかったが、若干の遺物が出土し、またピット等が検出された地点もある。

以下各地区毎にその概要を述べる。

1. 北斜面の貝層および遺物包含層

北斜面は、北へ向ってU字形に開口する狭い谷に面している。斜面の傾斜は、頂部付近ではやや急で距離約8mに対して5mほどの落差がある。中・下部では傾斜はゆるくなり平坦面も認められるが、この平坦面は後世における畑地造成によるものである。

斜面部分において貝層および遺物包含層が認められた。いずれも谷奥南東部から北西の谷中央部にかけてのびている。

貝層は、台地頂部平坦面が斜面へ移行する傾斜変換部から斜面中位部分にかけて細長くその分布が認められ、範囲は10×25mほどと推定される。厚さは最も厚い部分で約80cmである。貝層を構成する貝は、シジミを主体としているが、他にハマグリ、アサリ、ウミナナ等も相当量みられ淡鹹河水産のものを含んでいる。

この貝層部分は、かつて「金剛寺貝塚」として周知されていたもので、昭和22年の発掘調査はこの部分の貝層を対象としている。

遺物包含層も貝層と同様、地形の変換部から貝層の周囲に分布しており、特に斜面の下方に大きく広がっている。層厚は未調査のため明らかでないが、保存状態の良い包含層と思われ、その上面に、遺物が面をなして発見された部分もある。(写真図版3上)

出土遺物

出土遺物は大部分が縄文土器である。それらは各時期のものを含んでいるが、小片のため文様の不明なものや、地文のみのために所属時期を明確にし得ないものが大半である。したがってここでは、それらのうち比較的文様が明らかなもののみを取り扱い他は破片集計表として巻末に一括した。このことは以下の各地区においても同様である。

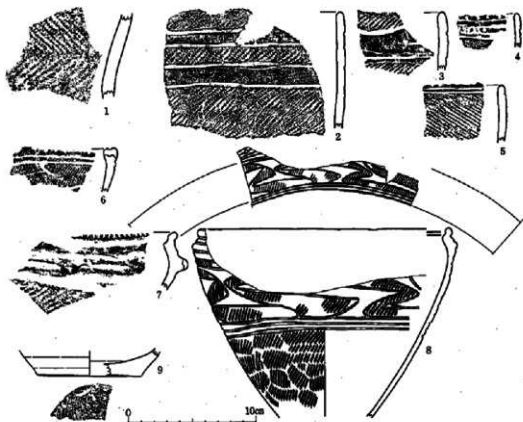
イ. 土器 (第5図)

〔縄文前期の土器〕 (第5図1)

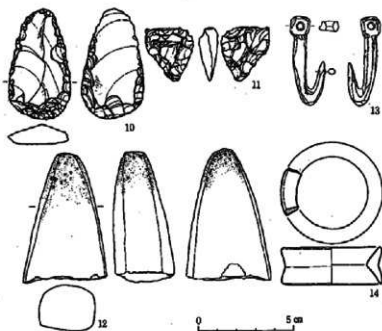
胎土に多量の繊維を含んでいる。LRおよびRLの原体によって羽状縄文が施されているものであるが磨滅のため結節の有無は明らかでない。前期初頭に位置づけられると考えられる。

〔縄文晩期の土器〕 (第5図2-8)

縄文晩期の土器には前半期のものと後半期のものがあり、前半のものは貝層部分から多く



第5圖 出土遺物(土器)



第6圖 出土遺物(石器・骨製品・土製品)

	第6 圖10	第6 圖11	第6 圖12
種 別	搔 器	不石 定形 器	磨石 製押
最 大 長	57.8	27.0	(62.2)
最 大 幅	32.1	24.4	(43.5)
最 大 厚	10.4	8.9	29.0
石 材	細 粒 灰 岩	珪 質 岩	石 安 山 英 岩

(單位: mm)

出土している。

前半のものの中には、波状口縁部に縄文帯が巡り、またその間に三叉状文が施され初頭大洞B式に位置づけられるもの（第5図2、3）、口唇部に刻目、口縁部に平行沈線や羊歯状の刻目列が施されるもので大洞C₁式期と考えられるもの（第5図4、5）等がある。

後半のものは、大洞C₂式に属すると考えられるものである。

6、7は、浅鉢形土器で、頸部に浮線だ円文が巡るもの（7）、体部に磨消縄文手法による文様が描かれるもの（6）等がある。

8は、頸部が張り出す鉢形土器で、体部上半に磨消縄文手法によって入組文状の文様が描かれている。

[平安時代の土器]（第5図9）

赤焼土器坏底部片が出土している。

ロ. 石器（第6図）

[搔器]（第6図10）

たて長剥片を利用し、打面側の縁辺に調整剥離を加えて、エンド・スクレイパー状に加工したものである。

[不定形石器]（第6図11）

側縁に粗い調整剥離を加えたものである。打面がまだ残されている。

[磨製石斧]（第6図12）

頭部破片である。全体に製作の際によるものと考えられる敲打痕が認められる。

ハ. 骨器

[釣針]（第6図13）

貝層部分の攪乱土中から採集された。獣骨を素材としたものであるが、再加工が著しく種類、部位等は不明である。糸かけ部分はほぼ方形をなし、中央部に穿孔されている。軸部と方形部分の間はわずかにえぐりこまれている。先端部のつくりは単純なもので、逆棘等はない。

ニ. 土製品

[環状耳飾]（第6図14）

直径5cmほどをなすと考えられるものの約1/6ほどの小片である。文様は施されていない。

2. 南側斜面の貝層および遺物包含層

南側斜面は、南側へ向って開く谷の東側縁部にあたる。谷はその奥部では北東、北西方にそれぞれわかれてせまくのびている。そして東側縁は、さらに谷奥部の手前でやや張り出しているため張り出し部の南側に小さくくびれが生じている。このくびれ部分から貝層および遺物包含層が確認された。台地をはさんで北斜面の包含層、遺物包含層と対称の位置にあたる。斜面

は、後世の畑造成によって旧地形はかなり失われており不明確な部分もあるが、その傾斜は、北斜面のそれに比してゆるやかで、距離20mに対し5mほどの落差である。

貝層は、やや斜面においてはいるが北斜面と同様傾斜変換部に形成されており約10m離れて南北に2ヶ所認められた。

南側の貝層は、くびれ部分の南端にあたり、斜面下方へわずかにのび、その範囲は10×10m程度である。この貝層部分は「金剛寺西貝塚」として周知されていたものに該当する。

北側の貝層は、くびれ部分の中央部にあたり、2×2mほどの極めて小規模なものと考えられるものである。

貝層を構成する貝種はいずれも北斜面の貝層と同様である。

遺物包含層は南側貝層の北西部から、北側の貝層を含み、斜面部分に広く形成されている。その範囲については、包含層が未買取地にまで広がるため、調査を実施することができず、明確になし得なかったが、斜面のほぼ全域に及ぶものと推定される。

出土遺物 (第7～12図)

イ. 土器

〔縄文前期の土器〕 (第7図15～18)

いずれも胎土に繊維を含んでいる。15は、口縁部に6条の燃糸圧痕、頸部に隆帯をめぐらしその中に原体末端の押捺の施されているもので、前期初頭上川名Ⅱ式に属するものである。他のものは羽状縄文の施されている土器で、上川名Ⅱもしくは大木1式に属するものであろう。

〔縄文後期の土器〕

瘤状小突起を有する土器 (第7図19、20)

19は単純深鉢、20は壺形(?)土器片である。いずれも文様中に瘤状小突起を有するもので、前者では平行沈線間に、後者では入組文中に施されている。

刺突・刻目帯を有する土器 (第7図21～24)

深鉢形土器片である。単純深鉢もの(22、23)と、頸部で一坦くびれる器形のもの(21、24)とがある。文様としては、弧線連結文の他に、磨消縄文による入組文とがある。刺突、刻目帯は、口縁部及び頸部に巡らされているもの(21、23、24)と、弧線連結文中を充填しているもの(22、24)とがある。

磨消縄文による入組文文様を主文様とする土器 (第7図25～28)

27は頸部でくびれる深鉢、他は壺形土器と考えられる。27では、頸部に頂部の二分するたて長の突起も付せられている。同様のたて長突起は25にも認められ頂部には刻目が加えられている。文様はいずれも磨消縄文手法によって入組文(26、27)や弧線文(25)が描かれ、また28では入組文結節部に三叉状文が施され、魚眼状三叉文に近い文様となっている。

これらの土器群はいわゆる金剛寺式として一括されるものである。しかし、たとえば刺突・刻目帯は瘤状小突起より後出するものと考えられているし、また28は晩期直前あるいは晩期に含めても差し支えないとも考えられている土器である。このようににはば広い内容をもつ土器群であるために、これまで後藤（後藤：1959他）、斎藤（斎藤：1968）、安孫子（安孫子：1969）氏等、各氏によって細分案が提示されているが、それぞれに異なっており、いずれも確立されていない。

〔縄文晩期の土器〕

三叉状文を有する土器（第7図29～36）

深鉢形土器と考えられるものが多い。単純深鉢のもの（29～34）、やや体部のふくらむもの、（36）等があり、また器形にも大小の違いがある。いずれも小波状口縁を有している。なお35は、口縁部に低い山形突起を有するものであるが、小片のため器形は明らかでない。

口縁部に文様帯を有し、文様帯中に三叉状文を主モチーフとした文様が描かれている。三叉状文には玉抱き三叉文（29、30、33）、入組三叉文（35）、魚眼状のもの（31）、あるいは口縁部に八字形磨消帯を有し、その中に上向きの三叉文を施すもの（32）等各種がある。また小形土器の中には、文様帯が体部にまで広く及ぶものもある。

これらの土器は、器形・文様上の特徴から大洞B式に属すると考えられるものである。

羊歯状文を有する土器（第7図37～39）

深鉢形、浅鉢形、注口土器等各種がある。

深鉢形土器（37、38）は、口縁部に下端を平行沈線で画された羊歯状文を主文様とする文様帯を有し、口唇部には刻目が施されている。

浅鉢形土器（39）は外傾する口縁部を有するもので、口縁部に同上の文様帯を有し、体部にも文様が描かれている。

注口土器（40）は体部片である。肩部に文様が施されている。

これらの土器は大洞B C式に属すると考えられる。

沈線または浮き彫りの手法によって曲線的な文様を描くもの（第7図41～45）

41、42は、頸部以上が長くのびて外傾する浅鉢形土器で、体部以下は再び張り出して底部に至るものと思われる。文様中に刻目も併用されており、ことに41は巨視的には羊歯状文に近い。

43は浅鉢形土器である。浮き彫りの手法で磨消縄文文様が描かれ、口縁部には彫刻的な装飾が加えられている。

44も浅鉢形土器で器面に磨消縄文文様を描くものであるが、区画は沈線によってなされ43に比し文様は横方向へ流れる傾向へ流れる傾向がみられる。口縁部の装飾も彫りが浅い。

45は壺形土器の体部片である。器面には朱が施されている。

これらの土器は小破片が多く文様の全容が不明であり、その時期は必ずしも明確ではないが、



第7圖 出土遺物(土器)

41、42は大洞BC式又はC₁式、43、45はC₁式、44はC₂式に属すと考えられるものである。

複数の平行沈線帯をたてに連絡し、すり消縄文文様を描くもの（第7図46～48）

壺形土器である。48はL-24区から出土し、口縁部に山形突起を有すると思われるものである。頸部と体中央部の平行沈線をたての3本単位の沈線で4つに分割し、内部に曲線を併用して文様が描かれている。また口縁内部にも沈線が巡っている。46、47も同様の体部片である。いずれも大洞C₂式に属すと考えられる。

エ字状文を有する土器（第8図49～62）

浅鉢形（49～56）、壺形（57、58）、甕形（58）のもの等がある。

浅鉢形のものでは、1. 口縁からあまり屈曲なく体部へ至るもの（49～51）と、2. 頸部を隆帝等によって張り出されたもの（52～56）がある。そして前者では沈線を主体としたエ字状文のみが施されるのに対し、後者では、隆帯には瘤状にもり上がる突起等による文様も併用されている。いずれも内面にも沈線が巡らされている。

壺形のは頸部に隆帯によるエ字状文（？）を巡らすものである。

甕形のは、いずれも数条の平行沈線を巡らし、その間の一部を彫去してエ字状文を描くもので、59では肩部に、60は胴上半に文様が施されている。また、いずれも文様中には朱が施されているものである。

他に台部のみの破片がある（61、62）。平行沈線を文体として文様が描かれている。以上の土器についても、明確にその時期を特定できないが、浅鉢形土器2は大洞C₂式に、他のものは大洞A式に属すると考えられる。

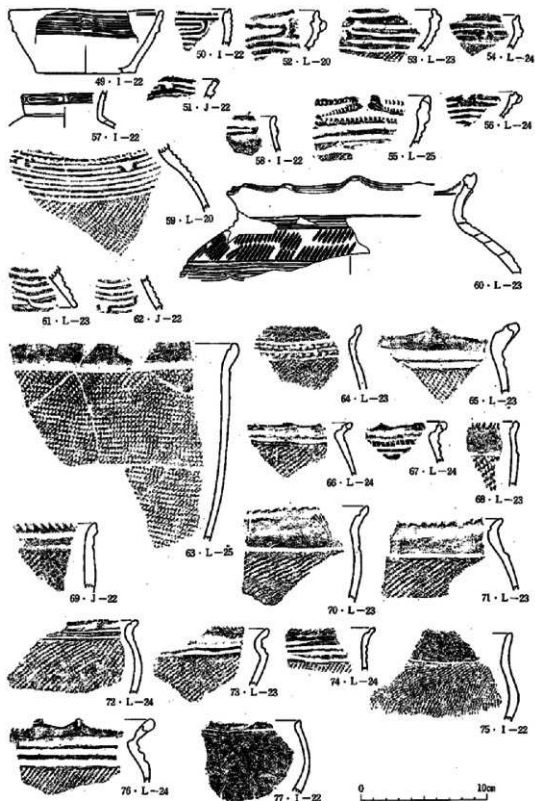
口縁部に磨消帯を有し、頸部に沈線・隆帯・刺突帯等を配してそれを区画するもの（第7図63～77）。

深鉢形（63～76）、浅鉢形（78～82）、壺（？）形（77）土器である。

深鉢形のものでは、口縁部が外反するものが圧倒的であるが、屈曲のないもの（69）もある。また体部の器形についても頸部でくびれたのちやや張り出しながら底部へ移行するものが多い。口縁形態では、小波状口縁をなすもの（63、64）、波状口縁をなし口縁上端に波頂部を除き沈線を除き沈線が施されるもの（65～67）、平口縁で口唇部に刻目の施されるもの（68～75）、山形突起と刻目が併用されるもの（76）等各種がある。

頸部の区画文様は1～数条の沈線によるものと、それに刺突帯の加わるものがある。いずれも口縁部内面には沈線が巡る。

浅鉢形土器では、頸部において器形が大きく屈曲するもの（78～80）とそうでないもの（81、82）とがあり、前者では、口縁部内面にも沈線が巡る。また前者では口縁部に山形突起有するものもあり、さらに頸部隆帯にも沈線や瘤状突起を付するものもあるなど、後者に比して各種



第8圖 出土遺物(土器)

の文様が施文されるものが多い。

これらの土器のうち、浅鉢形土器で頸部の屈曲する土器は、前記“エ字状文を有する土器”の浅鉢形土器2に共通する特徴が認められ大洞C₂式に属すると考えられる。しかし、他のものについては明確ではなく、特に深鉢形土器は粗製土器に近いものであり、大洞C₂、A式いづれにも共伴する例がある。

口縁部に平行沈線帯や刻目帯をめぐらすもの（第9図83～86）。

86は口縁部に3条の平行沈線をめぐらし、83～85は4条の平行沈線とその間に刻目帯を1条配するもので、いずれも口縁部に2個1対の小突起や刻目を配す深鉢形土器である。後者では口縁部はやや内湾するものと外湾するものがある。大洞C₁、C₂式に属すると考えられる。

頸部に磨消帯を有するもの（第9図87～90）。

壺形（87～89）、深鉢形（90）のものがある。

壺形のものでは、口縁部内面には沈線が巡っている。

88は口縁部に大小の山形突起を配し、大突起下には三角形の彫加えられている。また突起頂部を除いた口縁部上端にも沈線が施される。89は口縁部に2個1対の小突起を有するものである。小片のため詳細は明らかでない。いずれも大洞C₂式に属するものであろう。

深鉢形土器は、口縁部は外傾し体上半部で直立気味に立ち上がる器形のもので、頸部に上端を沈線によって画されたわずかな磨消帯を有する。口唇部には刻目が施されている。所属時期は明確でない。

口縁部に磨消帯を有し頸部で特にそれを区画せず体部の地文へ移行するもの（第9図91～93）。

深鉢形（91、92）、甕形（93）土器がある。

いずれも頸部でくびれるもので、平口縁のもの（92）、小波状口縁のもの（93）、平口縁で口唇部に刻目が施されるもの（91）がある。甕形のは小波状口縁を有するものである。所属時期は明確ではない。

[弥生土器]（第9図94～97）

浅鉢（95、96）、鉢（？）形（94）土器と考えられるものであるが、いずれも小破片であり、文様を明確に把握できないものが多い。

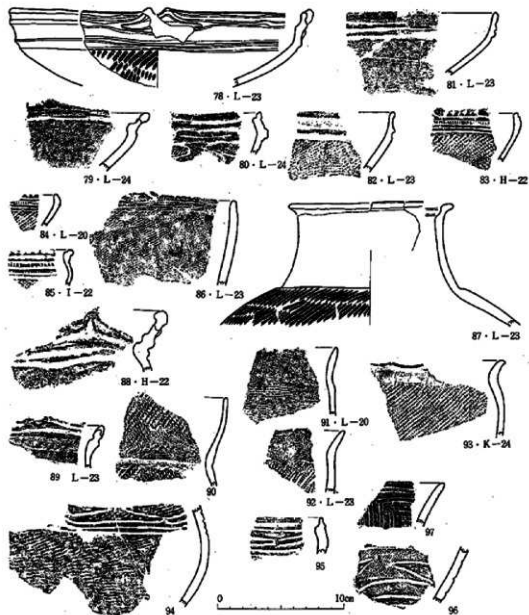
94～96は沈線によって文様が描かれており、曲線的な三角形のモチーフを有すると思われるもので、磨消縄文手法を用いているものもある。必ずしも弥生土器と断定できない要素を備えているものもあり、明確ではないが、文様上の類似性から大泉式に近い時期のものと思われる。

また97は鉢形土器の口縁部で、平行工具による沈線によって幾何学明文様を描くもので、桜井式に属するものと考えられる。

[奈良・平安時代の土器]

須恵器甕の体部片が1点出土している（L-18区）、小破片である、内外面ともにナデ調整が施されている。

これまで述べてきた土器の他に、地文のみのもの、無文のものがある。それらについては、破片集計表に示した。地文のみのものではLR斜行縄文が多く、わずかに燃糸文、櫛目状沈線のものも認められる。



第9図 出土遺物(土器)

ロ. 石器

〔石鏃〕 (第10図98)

有茎のものである。粗い調整剥離が加えられており、分厚いつくりである。

〔石匙〕 (第10図100)

横長の石匙である。調整剥離は粗く、つまみ部の作出も丁寧ではない。

〔石錐〕 (第10図99)

錐部が欠損している。つまみ部は自然面、打面が一部に残されている。

〔不定形石器〕 (第10図101～104)

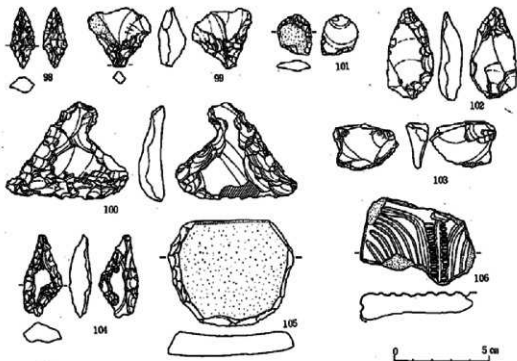
形態的に石鏃かと考えられるものもある。いずれも剥片を利用し、縁辺に調整剥離のみられるものである。

〔打製石斧〕 (第12図111)

礫を利用し、先端部、側縁部に粗い剥離が加えられている。形態的には分銅形を呈すが、自然面も多く残されており疑問が残る。

〔円板状石製品〕 (第10図105)

板状の素材の周縁を打ちかいて円形にし上げたものである。なお周縁の一部に自然面が残っている。



第10図 出土遺物(石器・土製品)

〔石皿〕 (第11図107)

小破片であるが、だ円形を呈する石皿の一部と推定される。上面に、わずかな稜によって区画された磨面がつくり出されている。

〔凹石〕 (第12図112・113)

だ円形のやや扁平な鏝に1～2個の凹を有するものである。凹のみではなく、112では、長軸方向両端に使用痕と考えられるあらい敬打痕がみられる。

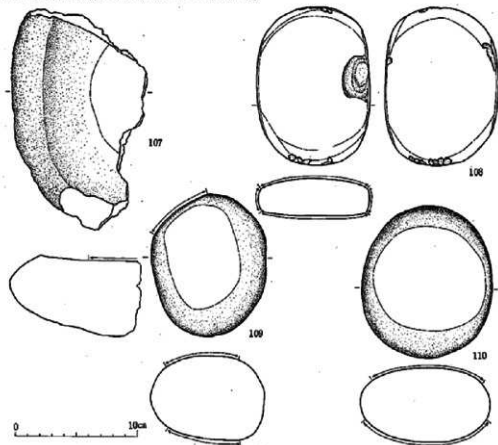
〔磨石〕 (第11図108～110)

だ円形、または円形のやや扁平な鏝の上下面や側縁の一部又は全面に磨痕のみられるものである。殊に108は磨痕が著しく、磨面は全面であり、原材の形状を推定し得ないほどである。

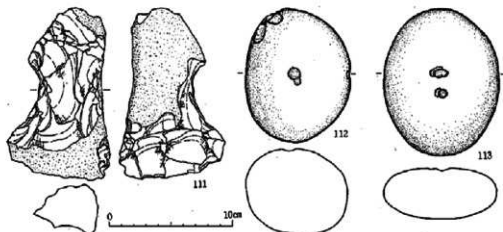
八、土製品

〔土版〕 (第10図106)

小片であり、全体の形状・文様は不明である。一面に中央部に2条の刻目帯をたてに施し、それを中心として左右に弧線が描かれるものと思われる。



第11図 出土遺物(石器)



第12図 出土遺物(石器)

種別	最大長	最大幅	最大厚	石 材	種別	最大長	最大幅	最大厚	石 材		
第10図98	石 鏃	31.5	12.4	7.8	頁 岩	第11図107	石 皿	(174.0)	(110.0)	(53.2)	石英安山岩
第10図99	石 鏃	(30.7)	32.5	13.9	珉質頁岩	第11図108	磨 石	129.7	92.6	30.8	
第10図100	石 鏃	51.5	63.7	11.4	珉質頁岩	第11図109	磨 石	116.5	93.6	70.0	花崗閃緑岩
第10図101	不定形 石 片	(21.0)	18.9	5.4	頁 岩	第11図110	磨 石	124.2	107.0	60.3	石英安山岩
第10図102	不定形 石 片	47.6	24.2	12.0	副砂石英安山岩 (実用燧石)	第12図111	打製石片	137.8	85.0	49.0	石英安山岩
第10図103	不定形 石 片	24.0	34.9	11.8	頁 岩	第12図112	凹 石	80.8	85.5	69.8	石英安山岩
第10図104	不定形 石 片	(43.2)	20.2	10.5	珉質頁岩 (一部玉子化)	第12図113	凹 石	119.0	93.5	41.5	石英安山岩
第10図105	打製 石 片	55.7	65.8	12.4	石英安山岩						

(単位mm)

3. 台地頂部平坦部とその出土遺物

台地頂部は基部では幅2~30mほどと狭いが、先端部では、東西50m、南北130mほどの平い平坦部分となっている。

今回調査の対象となったのは基部である。この地区では、表上下はすぐ地山へ移行する部分が多く、明確な包含層等は認められなかった。また、遺物は若干出土したが多くは風化・摩滅している。

しかし、大小のピットが数ヶ所で発見された。ことにはま中央部のP29区試掘ピットでは径30cm、深さ50cmほどのピットが発見された(写真図版3下)。広く拡張しての精査は行なわなかったため正確については明らかでないが、形状等からみて住居跡柱穴の可能性も考えられる。

出土遺物は少量であり、破片集計表に示した。

4. 台地縁辺部とその出土遺物

上記の三地区の他に調査の対象となった部分に台地南東斜面がある。この地区では若干の遺物の出土はあったが包含層等は確認されなかった。

しかし、調査対象区外である東側斜面では、正確な地点は明確ではないが貝層の存在が確認されている²¹。(第1図)

註：詳細については明らかでない。白鳥良一氏の教示による。昭和50年(?)頃、現地を訪れた際、ゴミ焼却のために掘られた穴の断面において確認したとのことである。

出土遺物については、破片集計表に示した。

5. 表面採集・地点不明の遺物

イ. 土器

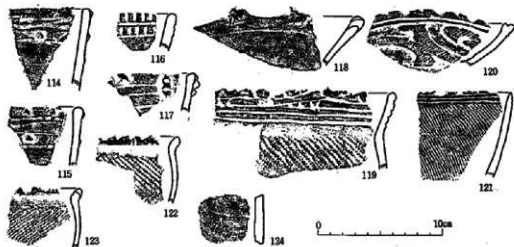
[縄文後期の土器] (第13図114-117)

多くは深鉢形土器である。瘤状小突起が施されるもの(114、115、117)、刻目帯が巡らされるもの(116)等がある。前者ではさらに、突起の形態が単純なもの(114、115)とたて長の突起に刻目が加えられるもの(117)とがある。118は浅鉢形土器で口縁部に、頂部が二分し肥厚する山形突起が配されている。いずれも金剛寺式に属すると考えられるものである。

[縄文晩期の土器] (第13図119-123)

119は頭部がややくびれ口縁上端に刻目の施された深鉢形土器である。口縁部には雑な沈線によって羊歯状文が描かれている。大洞BC式に属するものである。

120は浅鉢形土器である。口縁部に彫刻的な装飾が加えられ、体部には半浮き彫り的な手法によって曲線的な摩消縄文文様が描かれる。また体部内面には段落が巡っている。大洞C₁式に属



第13図 出土遺物(土器・土製品)

すると考えられる。

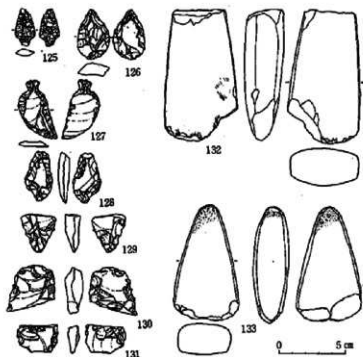
121は口縁部にわずかに刻目のみられる深鉢形土器である。口縁部に三条の沈線が巡り、その部分は磨消されている。晩期前半に位置づけられる。

122、123は深鉢形土器である。頸部に磨消帯を有し特に区画なく体部の地文へ移行する。いずれも口唇部に刻目が施され、123には2個1対の小さな山形突起も付せられ、さらに口縁部内面に沈線が巡っている。所属時期は明確でないが、晩期後半に属するものであろう。

2. 石器

〔石鏃〕（第14図125、126）

有茎のもの（125）と、無茎で基部が丸味をもって張り出すもの（126）とがある。前者は先端部および基部の一部が欠損しているものであるが、調整剥離は細かく丁寧なつくりである。これに比して後者は剥離も粗くまた大形である。



第14図 出土遺物（石器）

〔石匙〕 (第14図127)

たて形石匙である。両側縁に刃部加工が施されている。剥離は片面にのみ認められる。

〔不定形石器〕 (第14図128～131)

剥片を利用し縁辺に調整剥離が加えられている。形態上石鏃と考えられるもの(128)や、欠損しているため形態不明のもの(129)をも含んでいる。

〔磨製石斧〕 (第14図132～133)

頭部片、刃部片がある。

〔円板状土製品〕 (第13図124)

板状の土器片の周縁を打ちかいてほぼ円形に仕上げたものである。

素材となっている土器は、表面に条線が施されるもので、後期中葉の時期のものと考えられるものである。

	種 別	最大長	最大幅	最大厚	石 材
第14図 125	石 鏃	(28.2)	14.4	4.6	珪質頁岩
第14図 126	石 鏃	37.4	23.6	9.8	珪質頁岩
第14図 127	石 匙	50.9	27.3	5.2	珪質頁岩
第14図 128	不定形石器	(36.8)	20.5	7.4	頁 岩
第14図 129	不定形石器	(28.6)	(25.3)	(11.1)	珪質頁岩
第14図 130	不定形石器	(33.3)	(34.0)	11.9	珪質頁岩
第14図 131	不定形石器	(19.8)	30.3	7.3	黒色頁岩
第14図 132	磨製石斧	(98.0)	54.4	28.6	石英安山岩
第14図 133	磨製石斧	(87.5)	49.5	25.5	石英安山岩

(単位mm)

V. ま と め

1. 本遺跡は、従来、南北両斜面の貝層に別個の遺跡名を冠して呼称していたが、調査の結果、両者は同一遺跡内における貝層形成場所の相違であることが明らかとなった²⁴。そして両者は丘陵鞍部の斜面にその位置をしめている。また、東斜面部分においても新たに貝層が確認された結果、本遺跡の範囲は台地一円に及ぶと思われ、その縁辺には地点を違えて数ヶ所の貝層・遺物包含層が形成されていると考えられる。
2. 本遺跡については、すでに昭和22年に発掘調査が行なわれその具体的内容がかなり明らかになっている。すなわち、ハマグリ、シジミ等を主体とする半淡・半鹹の貝塚であり、多くの土器、石器の他に人骨等も出土した。土器は縄文後期後半から晩期初頭ごろまでのものが主体を占めており特にそのうちの後期後半の土器は「金剛寺式」土器として陸前地方における縄文土器研究上の標式となるなど、学史的にも著名であり、仙台平野南部の代表的な貝塚の一つとして知られている。今回の調査によっても、その内容は再確認されたが、その他に、新たに縄文晩期の遺物包含層を確認した。包含層は南北両斜面の貝層から下位に広い範囲で形成されており、その時期は大洞C₂式を中心として晩期中葉から後葉にわたっている。また明確な包含層等は確認できなかったが縄文前期初頭の土器や弥生時代の土器もわずかにみられ、さらに奈良・平安時代の土器も採集されている。これらのことから、本遺跡においては、かなり長い期間に亘って種々の活動が営まれていたことが推定される。

なお本遺跡保存については調査終了後の再三にわたる協議の結果、現状のまま保存することが決定されている。

註：このことは、すでに宮城県教委：1973中において述べてあり同1976発行の遺跡地各表では、「金剛寺貝塚」として総合してある。

(引用・参考文献)

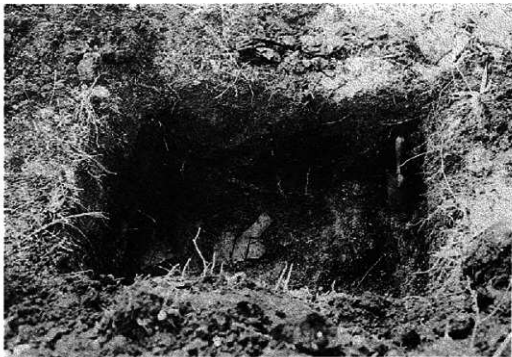
- 安孫子昭二 (1969) : 「東北地方における縄文後期後半の土器型式—所謂「コブ付土器」の編年—」 石器時代9
- 伊東 信雄 (1956) : 「宮城県古代史」宮城県史1
- 後藤 勝彦 (1959) : 「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土土器の研究—陸前地方後期縄文式文化の編年的研究—」 宮城県の地理と歴史2
- (1961) : 「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器について」 考古学雑誌48-1
- 斎藤 良治 (1968) : 「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について—宮戸台囲貝塚及び西ノ浜貝塚出土の土器を中心として—」 仙台湾涯の考古学的研究
- 坪井正五郎 (1908) : 「陸前名取郡地方における見聞」 人類学雑誌23の267
- 東京帝国大学 (1928) : 「日本先史時代人民遺物発見地名表」
- 宮城県教育委員会 (1973) : 「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」 宮城県文化財調査報告書第33集
- 角田市教育委員会 (1976) : 「梁瀬裏遺跡」
- 酒詰 仲男 (1959) : 「日本貝塚地名表」



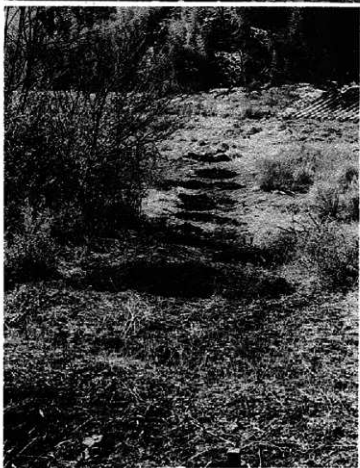
図版1 上：北斜面貝層部分 下：貝層



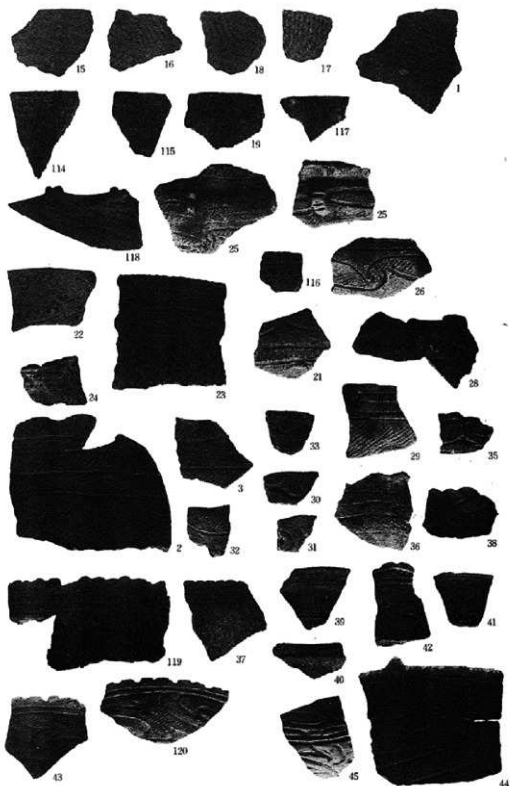
圖版 2 上：南斜面貝層部分 下：貝層



図版3 上：遺物出土状況(北斜面) 下：ピット検出状況(頂部平坦部)



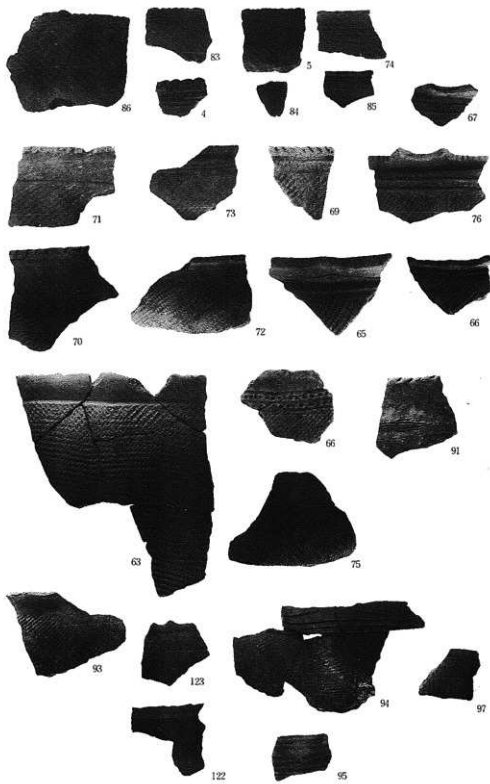
圖版 4
上・下調査状況
(南斜面)



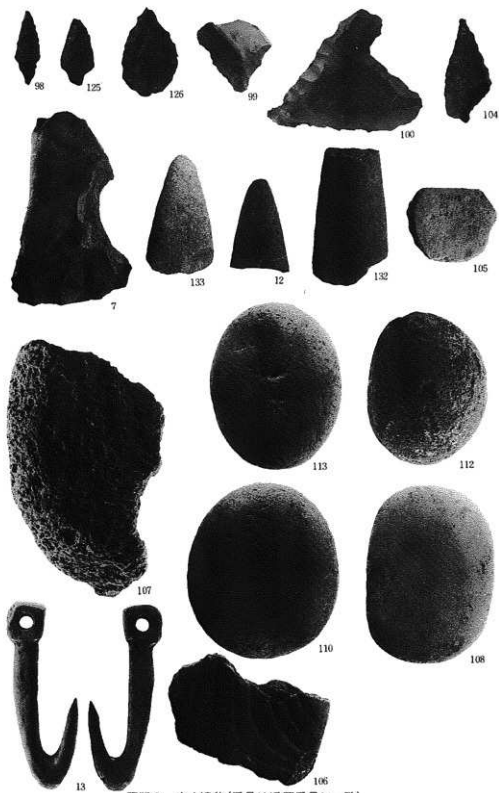
図版5 出土遺物(番号は挿図番号に一致)



図版 6 出土遺物(番号は挿図番号に一致)



図版 7 出土遺物(番号は挿図番号に一致)



図版 8 出土遺物(番号は挿図番号に一致)

附. 金剛寺貝塚採集の剥片接合資料

東北大学文学部 後藤 秀一

本稿で扱う資料は、石黒一郎氏（現東北学院大学学生）が本貝塚北斜面において採集されたもの（採集地点：9、10ページ第3図）で、その層位からみて縄文時代に属すると考えられるものである。極めて良好な資料と思われるので、ここに氏の了解を得て紹介するとともに若干の検討を加えたい。資料の公表を快諾された石黒氏に感謝申し上げます。

観察の対象とした資料は、剥片（二次加工痕のある剥片、微小剥離痕のある剥片を含めて）115点、石核2点である。石材はすべて頁岩である。母岩ごとに分けると7母岩に分類でき、そのなかの6母岩別資料に合計11例の接合資料が認められた。これらの接合資料のなかで、接合点数が多く、剥離作業のありかたがわかりやすい1母岩（S₁）の2接合資料について以下説明してゆく。

なお、剥片の計測は次の方法にしたがった。その結果は計測表にしめた。

1. 剥片の長さ、幅、打面の幅と厚さ、打角のそれぞれの測定、そして加撃点の位置、剥片の最大幅の位置の認定は、星野遺跡第3次発掘調査報告（芹沢編、1969、P61～69）にもとづいておこなった。
2. バルブの形状については次のように分けた。
 - A：加撃点が顕著でなく、打面と主要剥離面の境界を形成する稜線が主要剥離面の方につきてたようになり、バルブの隆起が認められない場合。
 - B：加撃点が顕著でなく、打面と主要剥離面の境界を形成する稜線がやや主要剥離面の方につきており、バルブがやや隆起している場合。
 - C：加撃点が認められ、打面と主要剥離面の境界を形成する稜線は主要剥離面の方につきておらず、バルブの隆起が顕著に認められる場合。
 - D：打面と主要剥離面の境界を形成する稜線は主要剥離面の方にまったくつきでておらず加撃点・バルブが顕著に認められる場合。
3. 背面の構成は次のように分類した。

剥片の背面を表にし、打面を上にした場合に、①は剥片の主要剥離面と同一方向からの加撃によって形成された剥離面を示す。②は右方向からの加撃によって形成された剥離面、③は①と逆の場合、④は②と逆の場合に形成された剥離面をそれぞれ示す。
4. パンチマークとしたものは、いわゆるパンチマークであり、打面上に残された不整形な半月状のキズを指している。

接合資料No.1 (第1、2図版、第6図版の1)

第2図版は、第1図版のリング、フィッシャーをぬいた、いわば模式図である。第2図版の剥片に付した番号は、計測表の番号と一致している。また、第2図版②[〃]a図の①面は分割面、②[〃]c図の②面は打面である。黒丸はポジティブバルブを示し、Cは自然面を示す。

接合資料No.1は、2つの個別別資料が接合したものである。すなわち、第1図版②と③は、それぞれの石核から剥離された剥片の接合例であり、第2図版②[〃]a図①面が、いわばその分割面である。

最初に第1図版②図の接合資料から検討する。

(剥離の順序)

- ① 第2図版②[〃]c図①面を形成した剥離。
- ② その面を打面として、剥片5の背面を形成した剥離と剥片5・6の連続的な剥離。そして、同じ打面からさらに剥離作業が進められ、その結果に剥片1・2の打面が形成されたと考えられる。
- ③ 剥片1・2の剥離。
- ④ 剥片1・2の剥離によって形成された面を打面として、剥片3・4の背面を形成した剥離、剥片3・4の連続的な剥離。
- ⑤ 剥片5・6の剥離によって形成された面を打面として、剥片7の背面を形成した剥離と剥片7の剥離。

工程としては、①、③が打面作出工程、②、④、⑤が目的剥片の生産工程と捉えられる。すなわち、④の段階までは、第1図版②a図が剥離作業面とされているが、⑤の段階で、剥離作業面は、第1図版②b図に新設されたと考えられる。しかし、新設された剥離作業面では、あまり剥離作業はおこなわれていない。

第1図版③図の接合資料の検討

(剥離の順序)

- ① 剥片8の打面を形成した剥離。
- ② 剥片8の剥離。
- ③ 剥片9・12・13の打面を形成した剥離。
- ④[〃] 剥片10・11の打面を形成した剥離。
- ④ 剥片9・13の背面を形成した剥離と剥片10・11の背面を形成した剥離。
- ⑤ 剥片9の剥離、剥片10の剥離。
- ⑥ 剥片11の剥離。
- ⑦ 剥片13の剥離。

⑧ 剥片12の剥離。

工程はこの接合資料からはうまく捉えることはできない。この接合資料がしめしていることは、1つの剥離作業面から打面を転位させ、順次打面を作出しながら剥離作業を進めていることである。

接合資料No.2（第3・4・5図版、第6図版の2）

第4図版は、第3図版のリング・フィッシャーをぬいた、いわば模式図である。第4図版の剥片に付した番号は、計測表の番号と一致している。また第4図版①[〃] a図と第5図版②[〃] 図の⊗面は分割面、①[〃] c図のⒸ・Ⓓ・Ⓔ・Ⓕ面は打面をあらわす。さらに黒丸はポジティブバルブを示し、cは自然面を示してある。

この接合資料も接合資料No.1と同様に、2つの個別別資料から成っている。すなわち、第5図版②[〃] 図と③[〃] 図である。

第5図版②[〃] 図の接合資料から検討する。

剥離の順序

- ① 第4図版①[〃] c図Ⓒ面を形成した剥離。
- ② その面を打面として、剥片17・18・19・20の背面を形成した剥離と剥片18・21・22の連続的な剥離。
- ③ 剥片26・27の打面、すなわち第4図版①[〃] a図Ⓔ面を形成した剥離。おそらく②の打面とは異なる打面（自然面の可能性が高い）からの加撃による。
- ③[〃] 自然面を打面として、剥片19・20・23・24の連続的な剥離。一方、剥片20の剥離以前に剥片25の剥離がおこなわれている。そして、剥片27・26の剥離が剥片25の次におこなわれている。
- ④ 剥片28・29・30・37の打面を形成した剥離。これらと併行して、第4図版①[〃] c図Ⓔ面、そして①[〃] c図Ⓕ面を形成した剥離がおこなわれている。
- ⑤ 剥片28・29・30の連続的な剥離、また第4図版①[〃] c図Ⓔ・Ⓕ面を打面として、剥片32・33・34の背面を形成した剥離と剥片32・33・34・35の連続的な剥離、そして、①[〃] c図Ⓒ面を打面として剥片36の剥離。剥片28・29・30の剥離と剥片32・33・34・35そして剥片36との剥離の順序は不明であるが、同一打面からの剥離は連続しておこなわれると仮定するならば、剥片32→33→34→31→35→36という順序が想定できる。
- ⑥ 剥片29・30・31・35の剥離によって形成された面を打面として、剥片37・38・39の背面を形成した剥離と剥片38・39の連続的な剥離、また剥片39の剥離以前に①[〃] a図Ⓔ面を打面として剥片37の剥離がおこなわれている。

第5図版③[〃] 図の接合資料の検討

それぞれの剥片の打面を形成した剥離、そして連続的に剥片16・14・15と剥離をおこなって

いる。

以上この接合資料No.2の剥離作業のありかたをまとめると次のようになる。

自然面除去（背面が自然面によって大部分おおわれている大形の剥片、たとえば剥片17・25など）をおこなう。そしてこの場合の同一打面からの連続的な剥離がおこなわれる。最初からすべて剥離作業面の自然面を除去するのではない。打面をきめ、自然面除去→剥離作業→打面転位そして打面作出→（自然面除去）→剥離作業となり、あとは状況に応じて打面を転位させ剥離作業を進めてゆく。そして、おそらく打角の問題で目的剥片がこれまでの剥離作業面から得られなくなると、剥離作業面の更新がおこなわれる。この接合資料No.2は、石核の素材の形状が扁平なので、剥離作業面が表裏両面にだけ設定される。したがって旧剥離作業面が新しい剥離作業面の打面となる。

接合資料No.1・2をまとめて全体の剥離作業のありかたを復元してみると、この母岩別資料1（S₁）は、少なくとも4個体以上に分割されている。ただし分割といっても、それが粗割りされたのか、あるいは大形の剥片を剥離し、それを石核に転用したもののかの判断できなかった。なお原石の形状は扁平な角礫で、大きさは約18.0×15.0×15.0cmぐらいと推定される。

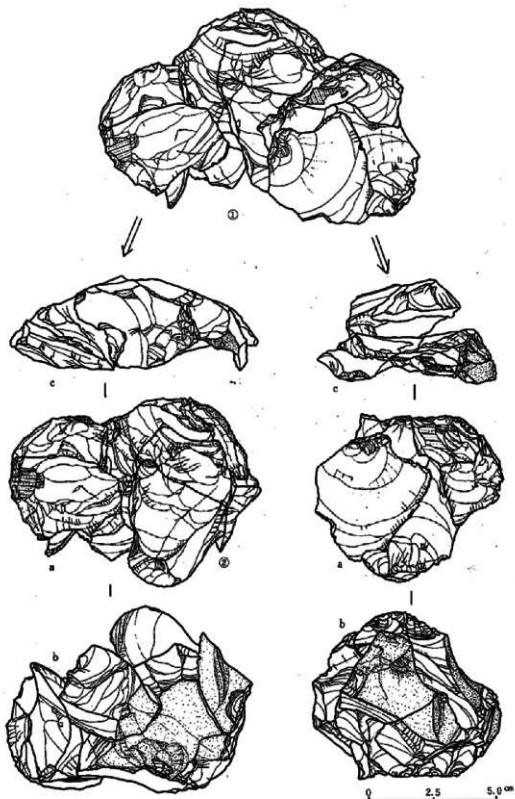
分割された石核の素材からの剥片生産のありかたは、接合資料No.1・2でそれぞれ検討してきたとおりである。すなわち、技術的には、石核調整、打面調整、打面再生が認められず、打面転位が頻繁におこなわれその都度打面を作出し剥片生産をおこなっている。

以上のような剥離作業のなかで生みだされる目的剥片は、規格的な剥片ではなく、初期の段階で剥離されたものほど大形で、後にならばなるほど小形化してゆく。すなわち、一定の形状と大きさが規定された剥片は生み出されていない。

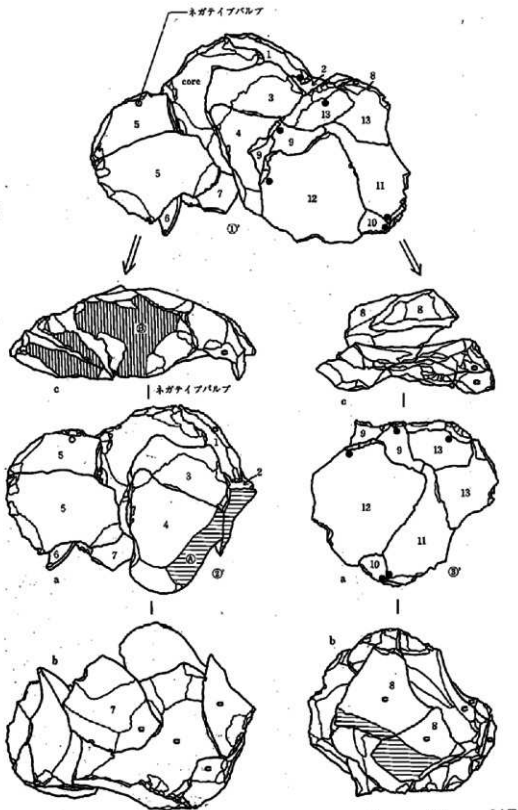
縄文時代の石器研究において、剥片生産技術についての資料提示はこれまでほとんどなく、対比が不可能に近いが、埼玉県風早遺跡、北海道七飯町聖山遺跡における資料と比較してみると、原則的には同様な剥片生産のありかたを示しているといえよう。

（参考文献）

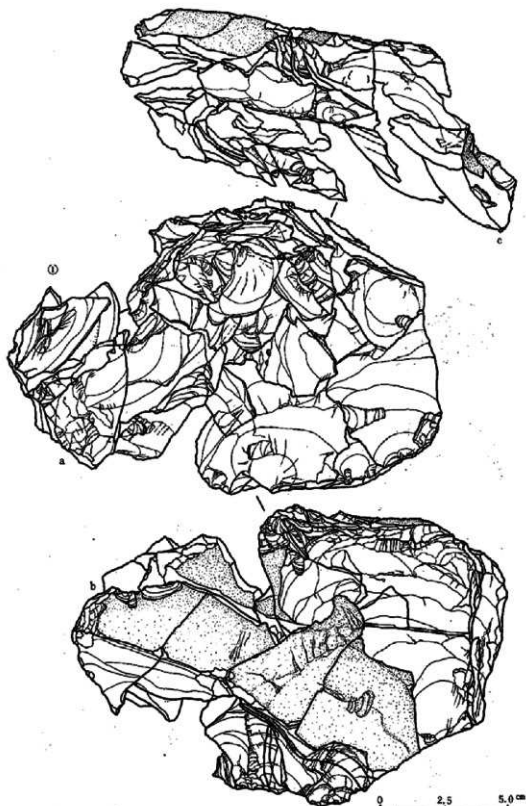
- 林謙作、1969、第3地点第4文化層の出土遺物、栃木市星野遺跡—第3次発掘調査報告、P. P55~87
芹沢長介、岡村道雄、小林博昭、戸田正勝、1974、基石遺跡
田中英司、1977、縄文時代における剥片石器の製作について、埼玉考古16号、P. P33~47



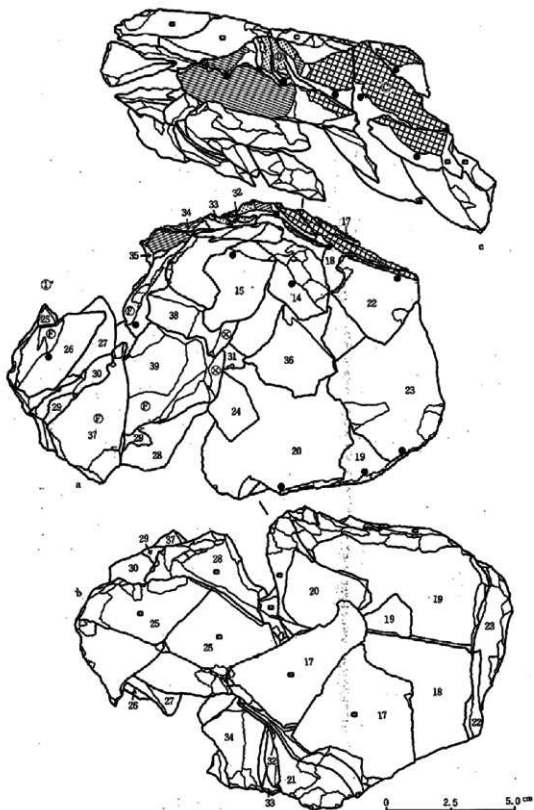
第1圖版 母岩別資料1(S₁)の接合資料No.1-(1)



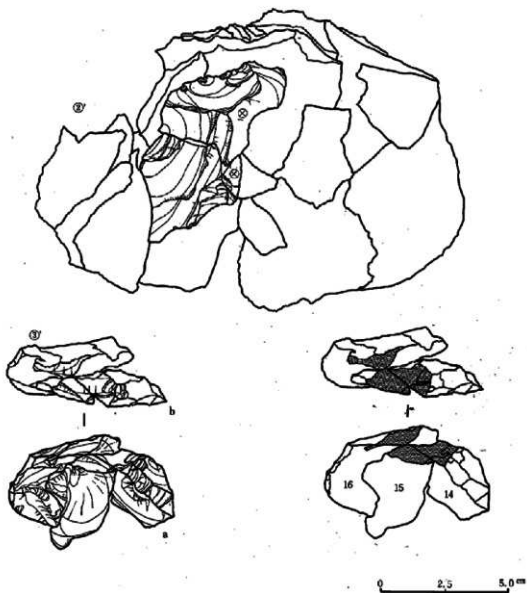
第2図版 母岩別資料1 (S₁)の接合資料No.1-(2)



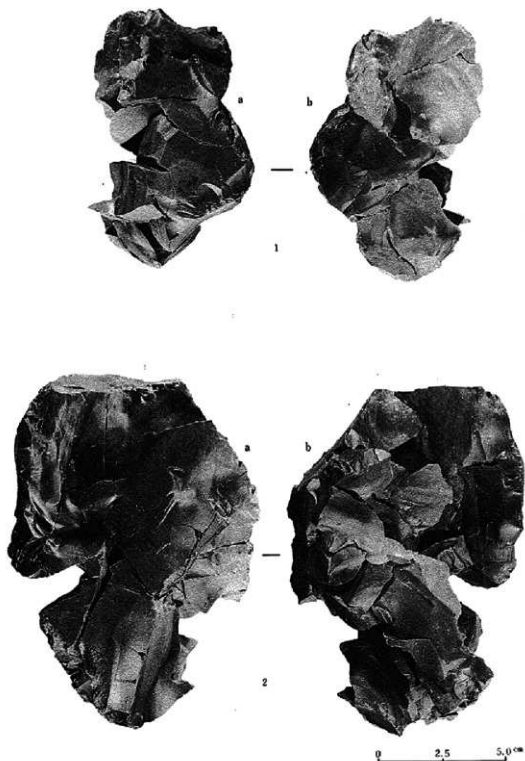
第3図版 母岩別資料1 (S.)の接合資料No.2-(1)



第4図版 母岩別資料1(S₁)の接合資料No.2-(2)



第5図版 母岩別資料1 (S₁)の接合資料No.2-③



第6図版 母岩別資料1(S₁)の接合資料No.1・2

測片計測表 (I)

No.	長さ×幅	打撃の状	打撃の幅 文字	打角	打撃点の 位置	最大幅の 位置	石材	加熱	定端の 形状	パルプ の形状	背面の構成	備考
1	4.48×2.46		0.35×0		左端	下部	S ₁	ナシ	フエ	B	①-①+自	調整アリ
2	3.20×3.39	2	2.37×1.20	95	右端	上部	S ₁	ナシ	フエ	B	①-①+自	
3	3.81×3.74	4	2.28×0.88	88	中央	下端	S ₁	ナシ	ヒ	B	④-④-①	
4	3.87×4.53	1	1.20×0.42	108	中央	下端	S ₁	ナシ	ヒ	C	②(分割面)-①-④	
5	4.81×4.43	1	3.58×1.16	106	中央	中央	S ₁	ナシ	フエ	B	①-①-④-④	
6	4.77×3.38	2	2.98×0.97	90	中央	上端	S ₁	ナシ	ヒ	D	④-①	
7	3.98×4.00	2	2.61×1.10	94	中央	上部	S ₁	ナシ	ヒ	D	②(分割面)-②-①-①	
8	5.66×4.10	3	2.92×1.30	103	中央	下端	S ₁	ナシ	ヒ	B	②(分割面)+自	
9	4.27×3.81	3	2.11×0.96	110	右側	中央	S ₁	ナシ	ヒ	B	②-①-①-①	
10	2.66×2.20	2	1.10×0.25	105	右端	中央	S ₁	ナシ	フエ	C	①-①-①-③-①-①	
11	5.29×4.42	1	1.30×0.69	106	右端	中央	S ₁	ナシ	フエ	B	①-①-③-④+自	
12	4.80×4.65	2	1.50×0.46	110	左側	中央	S ₁	ナシ	フエ	B	③-①-①-①-④-④	
13	4.08×4.48	5+自	3.80×1.03	111	中央	中央	S ₁	ナシ	フエ	B	①-③-②-③	
14	3.51×3.01	3	3.25×2.16	128	右側	中央	S ₁	ナシ		C	②(分割面)	
15	2.30×3.75	5以上	2.60×1.59	92	中央	下端	S ₁	ナシ	ヒ	B	③-③-①-①-①	
16	3.82×2.65	2	1.90×0.82	114	左側	中央	S ₁	ナシ	フエ	B	①-④	
17	7.13×6.27	1	2.46×0.84	109	中央	下端	S ₁	ナシ	フエ	D	自	
18	6.00×3.00	1	4.80×1.80	98	左側	中央	S ₁	ナシ	ヒ	D	①-①	
19	5.12×3.66	5以上	4.28×0.84	115	中央	中央	S ₁	ナシ	フエ	C	①-③	
20	5.50×5.46	6	2.58×0.89	103	右端	中央	S ₁	ナシ	フエ	D	③-③-①-①	
21	4.96×4.59	5(横)	3.86×2.01	111	中央	中央	S ₁	ナシ	ヒ	B	①-①-①	
22	3.22×4.07	1	3.03×1.32	90	右側	中央	S ₁	ナシ	ヒ	D	①-①	
23	4.74×5.07	5以上	2.40×1.19	100	中央	下端	S ₁	ナシ	フエ	D	③+自	
24	2.18×2.69<						S ₁	ナシ	フエ		③-③+自	
25	7.90×7.28	5以上	2.85×1.10	97	中央	中央	S ₁	ナシ	ヒ	C	④-①-③-①+自	
26	2.73×4.50	1	1.85×0.89	121	右側	中央	S ₁	ナシ	フエ	B	①-①-①	
27	2.58×3.70<					下端	S ₁	ナシ	ヒ		②-①-①	
28	7.56×5.81	3+自	3.15×0.95	95	右側	中央	S ₁	ナシ	ヒ	D	③-③-①-①+自	
29	2.78×3.21<	1	3.17×1.21		中央		S ₁	ナシ		C	①-①-①	
30	4.81×3.35	2(縦)	3.19×0.80	98	中央	上端	S ₁	ナシ	ヒ	C	①-①-①	
31	6.54×4.16	1	4.02×0.98	102	左側	上端	S ₁	ナシ	フエ	C	①-①-④	
32	3.73×3.70	4	2.01×0.83	107	右側	上端	S ₁	ナシ	ヒ	C	①-①-①-①+自	
33	2.85×2.38	5以上	2.15×0.65	106	中央	上端	S ₁	ナシ	フエ	D	①-①-①-①	
34	4.58×4.10	1	2.12×0.75	100	中央	中央	S ₁	ナシ	ヒ	D	①-①-③-①	
35	6.74×2.48	1	2.67×1.41	92	中央	下端	S ₁	ナシ	ヒ	B	①-②-③-③-④	
36	3.97×3.35						S ₁	ナシ	ヒ			
37	2.68×5.67	1	5.48×3.12	97	左側	上端	S ₁	ナシ	ヒ	B		
38	3.50×5.41	1	5.44×1.65	118	中央	上端	S ₁	ナシ	ヒ	B	③(分割面)-①-④	
39	3.89×5.09	2(縦)	3.57×1.38	113	中央	上部	S ₁	ナシ	フエ	B	①-③-①-①	

鋼片計測表(2)

No.	長さ×幅	打角の 形状	打角の幅 寸法	打角	鋼片の 位置	最大鋼 片の位置	石材	加熱	鋼片の 形状	バルブ の形状	背面の構成	備考
40	3.65×3.80	1+自	3.60×1.21	82	中央	上端	S ₂	ナシ	ヒ	A	②-①-③	
41	3.15×3.05	1	0.95×0.42	93	中央	下端	S ₂	ナシ	ヒ	C	④-①-④	
42	4.23×2.45	1	1.05×0.63		右端	中央	S ₂	ナシ	ヒ	B	①-①-④-①	
43	2.30×2.27	線状	0.73×0		中央	下端	S ₂	ナシ	ヒ	B	③-④-①-①-①	
44	1.77×1.39	1	1.23×0.29	115	中央	上端	S ₂	ナシ	フエ	C	①-②-①	
45	2.41×1.81	1	0.28×0.31	109	中央	中央	S ₂	ナシ	フエ	B	①-④-①-①	
46	2.22×1.56	2	1.25×0.45	118	中央	上端	S ₂	ナシ	フエ	C	②-④-①	
47	1.50×2.10	3	2.10×0.43	98	中央	上端	S ₂	ナシ	ヒ	B	①	
48	2.55×2.06	1	0.57×0.29		右側	下部	S ₂	ナシ	ヒ	C	①-①-①-③	接合
49	2.17×2.15	1	1.20×0.27	109	左端	下部	S ₂	ナシ	ヒ	B	③-②-②-①-①	
50	2.41<×2.10						S ₂	ナシ	ヒ		①-①-①	
51	1.45×2.45	2	1.82×0.32	115	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	B	①-②	
52	1.97×2.00	1	1.79×0.78	118	左側	上部	S ₂	ナシ	フエ	B	①-①-①	接合
53	1.98×1.27	1	0.62×0.28	116	左側	上部	S ₂	ナシ	フエ	B	自	
54	2.41×2.32	1	0.73×0.36	105	中央	下部	S ₂	ナシ	ヒ	C	②-①-①	接合
55	1.85×1.69	1	0.50×0.12	110	中央	下部	S ₂	ナシ	ヒ	B	④-③-①-①	
56	2.09×2.71	1	2.21×0.65	113	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	A	④	
57	4.25×4.65	1	0.82×0.32	107	中央	中央	S ₂	ナシ	フエ	B	④-②-②	
58	2.40×2.16	1	0.50×0.38	118	中央	下部	S ₂	ナシ	ヒ	C	①-②+自	
59	2.55×2.67	1	1.42×0.50	110	中央	下部	S ₂	ナシ	フエ	C	②-①-①	
60	2.78×4.00	1	1.97×1.01	98	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	D	①-①-①	
61	2.60×3.25	線状	0.35×0		中央	下部	S ₂	ナシ	フエ	C	①+自	
62	3.23×1.72	1	0.69×0.40	109	左側	下端	S ₂	ナシ	ヒ	A	④-②	
63	2.45×2.65	2	1.10×0.35	112	中央	上端	S ₂	ナシ	フエ	C	④-①-①	
64	2.84<×3.97						S ₂	ナシ	ヒ		自	
65	1.80×2.37	1	0.81×0.21	113	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	B	④-①-①	
66	2.95×2.29	1	0.50×0.23	115	左端	中央	S ₂	ナシ	ヒ	C	①	
67	3.39×3.85	自	2.95×1.02	125	左側	中央	S ₂	ナシ	ヒ	A	自	
68	3.13×4.38	自	1.85×1.05	95	中央	下端	S ₂	ナシ	ヒ	D	①-①	
69	4.57×5.02	4	4.40×1.11	95	右側	上端	S ₂	ナシ	ヒ	D	②-①-①-④	リベンチマーク ₂ 接合
70	2.78×3.43	2	2.60×0.28	94	右端	上端	S ₂	ナシ	ヒ	B	②-①	
71	3.73×3.37	自	2.87×1.18	103	左側	中央	S ₂	ナシ	フエ	D	③-②-①-③	
72	3.55×4.50	3	3.32×1.00	105	左側	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	①+自	リベンチマーク ₂
73	4.62×3.25	1	1.65×1.25	80	左端	中央	S ₂	ナシ	ヒ	A	③	リベンチマーク ₂
74	4.60×4.31	自	2.58×0.91	120	中央	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	①-①-①-①	
75	3.87×3.00	1	2.00×0.85	95	中央	中央	S ₂	ナシ	フエ	D	②-①-①-①	
76	4.50×3.99	1	2.30×0.97	128	中央	上端	S ₂	ナシ	ヒ	B	①-①+自	リベンチマーク ₂
77	3.78×3.47	3(線)	2.61×1.68	110	左側	下部	S ₂	ナシ	フエ	C	②-②-①-①	
78	3.89×3.37	2(線)	1.30×0.38	115	右側	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	②-①-①-①	

鋼片計測表(3)

No.	長さ×幅	打筋の 部	打筋の 寸法	打角	壁厚 の位置	構造 の位置	石材	加熱	両端の 位置	バルブ の形状	背面の構成	備考
79	2.24×1.43	1	0.32×0.12	130	中央	下部	S ₂	ナシ	フエ	B	①-②-①	
80	1.95×2.65<						S ₂	ナシ	ヒ			
81	2.90×2.29	1	0.71×0.30	115	左端	中央	S ₂	ナシ	ヒ	B	①-①-①-①	
82	2.68×3.42<						S ₂	ナシ	ヒ			
83	3.45×2.80	2	1.61×0.80	118	中央	下部	S ₂	ナシ	フエ	D	③-③-①-①	接合
84	2.58×3.44	1	0.70×0.34	113	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	C	①-①	
85	2.24×2.09	1+自	2.05×0.39	118	右端	下端	S ₂	ナシ	ヒ	C	①-①	
86	2.73×3.27	1	3.02×0.15	108	中央	下端	S ₂	ナシ	ヒ	D	②-②	
87	2.75×2.77<						S ₂	ナシ	ヒ			
88	2.04×2.32	継状	1.48×0		右端	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	②-②-②	
89	3.64×2.86	1	2.17×0.54	110	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	D	①-①-①+自	
90	2.60×2.46	継状	0.41×0		中央	上部	S ₂	ナシ	フエ	C	自	
91	1.91×2.05	1	1.50×0.33	105	左側	中央	S ₂	ナシ	ヒ	C	①-②-①+自	
92	3.13×3.51	3	2.11×0.65	104	左側	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	①-①-①+自	調整アリ
93	2.79×2.07	自	1.76×0.48	108	左端	上部	S ₂	ナシ	フエ		①-①-①-①	
94	4.05×2.76	1	2.02×0.75	115	中央	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	①-①-①-①+自	調整アリ
95	2.08×2.73	1	0.92×0.45	110	中央	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	①+自	
96	2.38×2.23	1	1.68×0.59	110	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	A	①-①+自	
97	3.54×3.05<						S ₂	ナシ				
98							S ₂	ナシ				
99	4.85×2.76<						S ₂	ナシ	ヒ			
100							S ₂	ナシ				
101	3.11×4.02	自	2.55×1.12	119	中央	上端	S ₂	ナシ	フエ	A	①-②+自	
102	3.29×4.24	1	1.92×0.20		右側	上部	S ₂	ナシ	ヒ	C	調整①	接合
103	3.75×3.58	1	2.83×1.25	110	右側	上部	S ₂	ナシ	フエ	C	①-①-①+調整	
104	3.09×5.10	4	3.85×1.11	112	中央	上端	S ₂	ナシ	フエ	A	④-①-①-①	接合
105	6.73×3.88	3	2.22×1.05	107	右端	上端	S ₂	ナシ	フエ	C	①-①-②-②	
106	4.04×4.05	2(継)	2.22×0.54	98	中央	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	①-②-③	接合
107	3.08×2.89	1	2.15×1.01	100	右側	中央	S ₂	ナシ		D	③-③	
108	3.40×2.89	1	0.80×0.55	117	左側	下端	S ₂	ナシ	オ	D	①-②-③-①	接合
109	3.41×6.11	2	1.02×0.37	104	中央	下部	S ₂	ナシ	ヒ	C	①-①-③	
110	2.69×3.20	自	1.28×0.45	98	中央	中央	S ₂	ナシ	ヒ	C	①-②-④	調整アリ
111	4.18×3.94	1	1.92×1.28	108	右側	中央	S ₂	ナシ	フエ	B	①-①-①-①	
112	3.82×3.67	1	2.16×0.65	110	右側	中央	S ₂	ナシ	フエ	C	③-①-①-①	接合
113	2.98×3.94	1	3.35×1.10	120	中央	上端	S ₂	ナシ	フエ	B	①-①-③	
114	4.13×4.02	3	3.43×0.72	107	右側	上端	S ₂	ナシ	ヒ	D	①-①-①-③	
115	4.53×2.45	自	0.85×0.34	111	中央	下端	S ₂	ナシ	フエ	B	①-①-①-④-④	